

御卒業おめでとう

平成30年度第70回

卒業証書授与式

式次第

1. 開 式 の こ と ば
2. 国 歌
3. 校 歌
4. 卒 業 証 書 授 与
5. 表 彰 状 授 与
 - 1) 日本私立中学高等学校連合会賞
 - 2) 桃 李 賞
 - 3) 皆 勤 賞
 - 4) クラブ功労賞
6. 学 校 長 式 辞
7. 理 事 長 祝 辞
8. 祝 辞
 - 1) 福 島 県 知 事
 - 2) 福 島 市 長
 - 3) 桃 李 の 会 会 長
9. 在 校 生 代 表 送 辞
10. 卒 業 生 代 表 答 辞
11. 式 歌 仰 げ ば 尊 し、 蛍 の 光
12. 閉 式 の こ と ば

福島成蹊高等学校



式 辞

三寒四温と申しますが、寒さの中にも春の温もりが感じられる本日、平成30年度第70回卒業式を挙げるにあたり、ご来賓、保護者の皆様のご臨席を賜り厚く御礼申し上げます。

ただ今ここに於いて、高等学校普通教育課程を修了しました卒業生諸君312名に、卒業証書を授与しました。卒業生諸君、卒業おめでとう。また、今日までご子息ご息女を育てられた保護者の皆様のご労苦に対し、こころからお祝いを申し上げます。おめでとうございます。保護者の皆様には、これまでの本校に対するご理解と物心両面に渡るご協力とご支援に厚く御礼を申し上げます。

卒業生諸君は、間もなく8年が経とうとして居りますが前代未聞の大震災を経験しました。自然災害と、直後の人災がもたらした混乱の中で、中学・高校と福島で学び、他では出来ない沢山の貴重な経験をしました。気づいてはいないかもしれませんが、諸君にはその証として様々な困難を乗り越えて来た力が備わって居ます。その事を実感出来た行事が海外研修ではなかったでしょうか。普通コースは台湾で、特進コースは多民族国家であるカナダで、一貫コースはベトナムとカンボジアで研修を行いました。これらの国は、新興国・先進国・途上国にカテゴライズされ、置かれている状況が異なります。しかし、文化・同世代交流を通じ、感じた事は様々でしょう。取り分け、置かれている状況下で懸命に生きる姿から、学び、多くを考えさせられた事でしょう。恐らく日本に居ては気づけない衝撃にも出会った筈です。どうか様々な問題を抱えているのは自分だけではないと言う事、そして、常に相手の立場に立って考える事の大切さを忘れないで下さい。

3年生諸君は、伝統を受け継ぎ、良き市民として生活してくれた事を誇りに思います。特に、挨拶の良さ、品格を感じさせる制服の着こなし、公共の場に於いての思いやり等、『校訓』の理念を態度で示してくれて嬉しかったです。また、何事にも正攻法で取り組む姿勢は、学習・クラブ、生徒会、ボランティア活動等で多くの成果を挙げました。換言すれば、勤勉が本校の代名詞になって来た様に思います。中でも、陸上競技クラブ・水泳部・ギタークラブの全国大会常連校としての活躍は、本当に素晴らしく名誉でもあります。集大成とも言える進路に於いては、既に努力が実を結び、進路が決まっている人も居りますが、受験真っ直





中の人も少なくはありません。どうか、最後まで全力を尽しましょう。諸君が必ず志望校に合格すると信じています。

ここで、餞として本校の校訓「桃李不言下自成蹊」に触れます。校訓は、承知の通り前漢時代の武将“李廣”の生き様と、分けて語ることは出来ません。“李廣”は、文帝・景帝・武帝の3代の皇帝に使えた、虎をも射抜く弓の名手でした。宿敵、匈奴の“単于”と勇猛果敢に戦い続け、かけがえのない邦を守った武人です。敵に恐れられもしましたが、反面、篤実さで敬われました。没後、徳を惜しみ、司馬遷が『史記』の中で謳ったのです。また、“李廣”が使えた武帝は、西域への拡大を図った皇帝です。その結果、国際化が一段と進み、人・情報・物流が激しく行き交う時代が生まれました。ある意味、現在にも通じるものがあります。時代に因らず人材とは、責任を全うする人なのですが、真に“李廣”は、この時代の救世主の一人だったのです。

ところで、諸君にとって次のステージは、どの様に写っているのでしょうか。恐らく、目まぐるしく変化する混沌たる社会に見えるかも知れません。人によっては、一步踏み出すにも勇気が必要と思え、もしかしたら、躊躇すら覚える。しかし、だからと言って怯んでは成りません。そこは諸君の活躍のステージであり、夢を叶える場でも在ります。明日からは、家庭・学校の庇護下にあった甘さは許されません。どの路に進むにしても、必ず障害が待ち構えています。立ちほだかる困難に立ち向かい、挑み、乗り越える勇気が必要です。その時、必ず諸君を“桃李のスピリット”が支えてくれます。曰く“自分に厳しく・他を思いやり・真摯に努力する”のです。どうか、“李廣”同様、かけがえのないモノを守れる人になって下さい。

結びに、諸君の母校が、次の世紀も繁栄し、名実共に誇れる学校となすべく、これからも尽力することを誓い私の式辞とします。

平成31年3月1日

福島成蹊中学校・高等学校

校長 本田 哲朗





祝 辞

厳しかった冬の寒さを幾分残しながらも、吾妻の山並みに若々しき春の気配が感じられる今日の佳き日に、多くのご来賓の皆様のご臨席を賜り、平成30年度福島成蹊高等学校卒業式がこのように盛大かつ厳粛に挙行出来ますことを、高い席からではございますが本学園理事会、教職員を代表し、心より感謝申し上げます。

只今、卒業証書を授与されました312名の卒業生諸君、ご卒業誠におめでとうございます。諸君の晴れの門出を心からお祝い申し上げます。

さて、学校法人福島成蹊学園は、大正2年（1913年）に、ここ福島の地に産声をあげて以来、幾多の変遷を経ながらも、校訓「桃李不言下自成蹊」の教えは変わることなく、105年に及ぶ歴史を重ねる中に、卒業生2万7千余名を社会に輩出してまいりました。

開学当時、福島県内には53の私学があったと聞いておりますが、当時あった私学のうち、今に至り現存する私学2校のうちの1校が、この場に臨んでいる卒業生諸君の母校であります。

平成25年度は学校法人福島成蹊学園創立百周年の記念すべき年でありました。今年度卒業生のうち、福島成蹊中学校から入学の諸君は、当時、初々しき中学1年生ながらも記念式典や記念桃李祭などの記念事業を立派に成し遂げ、キャッチフレーズ「世代をつなぐ桃李の絆」を、当時在籍の諸先輩とともに、実際の行動をもって示してくれました。この機会をお借りし、理事会の立場から敬意と感謝を申し上げます。

先ほど、校長先生から卒業証書の授与がありました。これは、高校生活3年間の中で、勉学や部活動などの各種自主活動に勤しみ、心身とも逞しき青年に成長していることの証であり、それぞれが積み重ねた努力の結実として、ご卒業という大きな栄冠を手にしたのであります。どうぞこのことは、それぞれにとっての大きな財産、堂々たる誇りとしていただき、各人が描く次なるステージにあっても、果敢にチャレンジを重ねていただきたいと思います。

さて、日本にとっての今年「平成」最後の年であり、新しい時代の幕開けの年でもあります。国際的事業を担う立場としては、G20大阪サミットやラグビーワールドカップ日本大会の初開催、さらに1年後には東京オリンピック・パリリ





ンピックの開催を控え、そのための準備事業等を一気に進めなければならない年となります。

そして国際的には、米中、米露の対立の深まり、ヨーロッパにおける社会の分断、各国での自国第一主義の台頭、さらに世界的規模での地球環境破壊が進んでいることなどにより、今年1月に発表された「世界終末時計」は残り2分を示すまでに至り、過去最短の時間を突きつけられています。

また、私自身は明るい要素として触れているつもりではありますが、このような混沌とした社会情勢に加え、社会そのものの動き自体がかつてない勢い・スピードの中で進行しています。IoT (Internet of Things) やAIなどをキーワードとする第四次産業革命、急激なグローバル化が進展している中であって、その変化に対応すべく、自ら考え動くことを大前提とした「21世紀型スキル」などが必然の時代となっています。

このように社会変動が大きい時代であって、新たなスタート台に立っている諸君こそが、変動に伴う諸課題を解決しつつ、新しい時代を切り拓き創造する世代の中核となることを期待して止みません。

本学園は、昨年度、教育理念に「心を育み、叡知を究める。」を掲げました。私どもが、ここに臨んでいる卒業生、そして在校生に期待することは、「桃李」の精神の下に、高い「志」と「叡知」の追求、そしてこのことを礎に「実行」する人たちがたれ、と言うことに他なりません。諸君のこれからの健闘を祈っています。

結びになりましたが、保護者の皆様には、この度のお子様のご卒業、誠におめでとうございます。また、本学の教育活動に絶大なるご理解とご協力を賜りましたことに深く感謝申し上げます。

大きな未来に羽ばたく卒業生諸君が、それぞれの道を歩むに当たり、恐れぬ勇者たることを祈念し、理事会を代表しての祝辞とさせていただきます。

平成31年3月1日

学校法人福島成蹊学園

理事長 高橋 幸七





送 辞

冬の寒さが和らぎ始め、陽の光やそよ吹く風の暖かさに春の気配が感じられる今日の佳き日に、夢と希望を抱いて学び舎を巣立たれる三年生の皆様、ご卒業おめでとうございます。在校生一同、心からお祝い申し上げます。

希望を胸にこの福島成蹊高校の門をくぐってから早三年、今先輩方の脳裏には、多くの人との出会いの中で、十人十色の、唯一無二の思い出を築き上げてこられた日々が浮かんでいるのではないのでしょうか。私たちにとっても、先輩方の背中を追いかける毎日の生活は一つ一つかけがえのない思い出となっています。

合唱祭では、創造性あふれるパフォーマンスで会場を盛り上げ、気持ちのこもった歌声に私たちの心はふるえたものです。桃李祭や新入生歓迎会などの行事でも、さすが先輩方と思わせる企画と行動力、完成度の高さで在校生一同驚かされました。また、球技大会や競技大会では、勝利に向かって全力で挑み、全力で楽しむ姿に、私たちは圧倒され、魅了されました。こうした先輩方の、何事にも前向きに取り組もうとする姿勢から、部活動においても、技術だけではなく、精神面でも多くのことを学ばせていただきました。学業に対しても、一人一人が明確な目標を持ち、達成するためにひたむきに努力を続け、学生本来のあり方を示してくださいました。このように先輩方は、学校生活のどこをとっても常に私たちの一歩先を歩く手本であり、誇りであり続けました。

さて今日を境に皆様はそれぞれの道へと歩んで行かれます。環境が多様に変化し、様々な問題が取り巻く社会に身を置き、辛く険しい道を歩まれるかもしれません。しかし、苦労という影が濃くあればあるほど、それを映し出す光は強いといます。その苦労の分の大きな成功が必ず待っているはずです。先輩方なら、この成蹊高校で培われた力を発揮し、たくましく道を切り開いて前進して行かれることと確信しています。そして私たちは、先輩方が紡いできた伝統を、責任を





持って受け継ぎ、日々努力していくことをここに誓います。

最後になりましたが、卒業生の皆様のご健康と、更なるご活躍を心からお祈り
申し上げます、送辞とさせていただきます。

平成31年3月1日

在校生代表 成田 匠

【送辞委員】

2年5組 成田 匠

2年9組 西東 優心





答 辞

吾妻おろしの風も和らぎ、阿武隈川の水も温み、北へ向かう白鳥の声も大きくなり始めた春のこの良き日、私たち312名は青春の1ページを飾ったこの学舎を巣立ちます。

3年前、私たちは希望と不安を胸に、この福島成蹊高等学校に入学しました。入学式当日は、雨を吹き飛ばすぐらいに、これから始まる3年間に対する期待で一杯でした。それから3年間、一貫コースでは6年間の仕上げの3年間として、日々クラスメイトと切磋琢磨しながら学習や部活動に励んできました。

一貫コースでは、中学校で学んだことを深め、志望校合格に近づけるよう、日々、仲間と学習に打ち込みました。中学校1年生から高校3年生までの縦のつながりを強め、自分たちの前後にも同じ目標に向かって努力する仲間がいることの大切さを学びました。

特進コースでは、目標達成のために仲間と努力し続けることに加え、今年度は様々な新しいことに取り組み、コース全体で成長することができました。また、センター試験や、国公立2次試験に向けての合宿では、仲間がいるからこそ頑張ることができたと実感することができました。

普通コースでは、学習はもちろん、部活動やボランティア活動にも精一杯取り組みました。部活動では、努力を实らせることの難しさを痛感し、打ちひしがれたこともありましたが、試行錯誤し、目標を達成した時の喜びは大きく、感動的な思い出となりました。ボランティア活動では、幅広い年齢層の方々、海外の方々との交流といった、学内ではできない体験を通して、相手の立場に立つてものごとを考えることの大切さを学びました。

成蹊高校では、数多くの行事を通していろいろなことを学ぶことができました。クラスやコースで一致団結し全力で挑んだ球技大会や競技大会。2年生の時に行われた桃李祭では学校全体が鮮やかに彩られ、1・3年生の時の合唱祭では、時間を惜しんで練習を重ね、美しいハーモニーを奏でるとともに、クラスの和を醸し出すことができました。研修旅行は、一貫コースはベトナム・カンボジアへ、特進コースはカナダへ、普通コースは台湾へと、それぞれ違った国を訪れました。文化の違いを肌で感じることは刺激的で、これからの進む道の幅を広げると同時に、客観的に日本を見ることができたことで、日本文化への理解もより深めることができました。

このようなかけがえのない日々を過ごす中で、私たちは多くの方々に支えられてきました。1人ひとりに対して親身に、時には厳しい言葉で向き合って下さった先生方には、私たちの進むべき道を明るく照らしていただきました。遅くまで学校に残り、私たちのために様々なことをしていただいていたとお聞きしていま





す。本当にありがとうございました。先生方の教を胸に、これからの人生を歩んでいきたいと思ひます。また、多くの友人たちと受験期の一歩苦しい時期には励まし合ひ、将来の夢を思ひ描いてともに乗り越えることができました。そんな切磋琢磨した日々も、今日で終わりを告げます。明日からはそれぞれの道で、目標に向かって弛まぬ努力をしていきます。素晴らしい仲間との出会いは私たちの宝です。ありがとう。そして、甘えてばかりだった家族にも感謝したいと思ひます。毎日のお弁当や部活動の応援など、どれほど励まされたか、言葉では言い尽くせません。わがままや不満をぶつけたこともありました。それでも、支えてくれたおかげで、今日の日を迎えることができました。これからは自分の足でしっかりと歩いて行けるよう、頑張っていきます。本当にありがとうございました。

さて、いよいよ学舎を巣立つ時を迎えました。在校生の皆さん。皆さんがともに頑張ってくれたおかげで、行事や部活動を盛り上げることができました。高校生活は無限ではありません。限られた時間を、有意義に過ごすことができるよう、校訓「桃李不言、下自成蹊（桃李もの言わざれども、下自ずから蹊を成す）」を体現できるよう、人間を大切に、周りの人に感謝して生活をしていって下さい。そして新たな歴史を築いていって下さい。

今年、4月で平成の世が終わります。私たちは「平成最後の卒業生」となります。「平成」という元号の由来の一つに、「内平らかに外成る」があります。しかし、平成の時代は、必ずしも「内平らかに、外成」ったわけではありません。国内では様々な問題が噴出し、未曾有の災害が起り、海外では紛争やテロが未だに続いています。これからの長い道のりの中には解決が困難なことが数多くあるに違ひありません。しかし、成蹊で学んだ桃李の精神をもってすれば、乗り越えることができるはずです。そう信じ、一歩一歩前に踏み出していきます。

最後に、本日の卒業式にご臨席を賜りました皆様に感謝するとともに、福島成蹊高等学校のますますの発展を祈念し、答辞といたします。

平成31年3月1日

卒業生代表 石黒美結

【答辞委員】

3年1組 石黒 美結

3年3組 大内 優佳

3年4組 菊地 麻友

3年7組 二階堂友大





祝 辞

本日ここに、晴れて卒業式を迎えられた皆さん、御卒業おめでとうございます。心からお祝いを申し上げます。

また、今日の晴れの日まで、子どもたちに限りない愛情を注ぎ育てこられた御家族の皆さん、建学の精神に基づき情熱をもって教え導いてこられた教職員の皆さん、さらには温かい御支援と御協力を賜りました地域の方々に対しまして、深く敬意と感謝の意を表します。

東日本大震災から間もなく8年が経過しようとしております。

本県では避難指示等が解除された地域において地元で小・中学校が再開し、未だ帰還困難区域となっている地域においても復興拠点の整備が加速化しているほか、新たな産業基盤の整備を目指す福島イノベーション・コースト構想が具体的に動き出し、廃炉技術やロボット、再生可能エネルギー関連産業の集積や構想を担う人材の育成などが進んでいます。

このような中、学業面での成果はもとより、芸術・文化やスポーツ、ボランティア活動、さらには地域との交流など、高校生の皆さんの多方面でのめざましい活躍は、県内各地を照らす明るい光となり、県民に勇気と希望を与えてくれました。

高等学校卒業という人生における大きな節目を迎え、皆さんの胸中には卒業の喜びとともに、在学中の様々な情景が思い浮かんでいることと思います。これまでの学校生活の中で培った幅広い教養とかけがえのない友人との絆は、生涯の財産となるはずです。今後は自らが選んだ道に向かって力強い一歩を踏み出し、それぞれの道で個性や能力を十分に発揮することを期待します。

福島県は前例のない様々な課題を抱えており、これを解決していくためには、果敢にチャレンジしていくことが重要です。「チャレンジ県ふくしま」としての取組を進めていくためには、若い皆さんの力が不可欠です。「生まれて良かった、住んで良かった、来て良かった」と思える「豊かなふくしま」を共に築き、明るい未来を切り開いていきましょう。

結びに、皆さんの前途に幸多からんことをお祈りし、新しい旅立ちに当たってのお祝いの言葉といたします。

平成31年3月1日

福島県知事 内堀雅雄





祝 辞

卒業生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。

本日、めでたく卒業証書を手にした皆さんは、それぞれに将来への夢を抱き、喜びと充実感で胸がいっぱいのことと思います。

また、皆さんの健やかな成長をあたたかく見守り、今日の日を心待ちにしてこられたご家族の方々、そしてこれまで熱心にご指導くださいました校長先生はじめ諸先生方の喜びはいかばかりかと拝察し、心よりお祝いを申し上げます。

皆さんは、入学からこれまで、この学び舎で勉学や文化・スポーツ活動、そして奉仕活動などに打ち込んでこられたことと思います。高校生活の中で心に刻まれたたくさんの思い出と、喜びや悲しみを分かち合った多くの仲間との友情は、一生の財産になることでしょう。

いよいよ明日からは、進学や就職など、皆さんそれぞれが志す道への第一歩を踏み出すこととなります。そして、その道の途中で様々な困難や試練にぶつかることもあるでしょう。しかし、どんな時も自分の夢や目標を見失わず、強い意志を持ち、挫けることなく積極果敢にチャレンジしていただきたいと願っております。

さて、東日本大震災と原発事故から間もなく8年、いまだ復興は「道半ば」という状況にあります。中核市への移行や2020年の東京オリンピックにおける野球・ソフトボール競技の開催、福島大学食農学類の開設、風格ある県都を目指すまちづくりなど、福島市は新ステージへ向けて大きく動き始めました。

今こそ、福島市が大きく飛躍する絶好のチャンスです。「開かれた市政」と「スピードと実行」をモットーに、今後の福島市を担う若い皆様はじめ、市民の皆様方の力を結集し、オール福島で新ステージに向けた動きを本格始動させてまいります。

一緒に福島市の新ステージをつくっていきましょう。

結びに、皆さんには、今日まで皆さんの成長を支えてくださった方々への感謝の気持ちを忘れずに、生まれ育ったこの「ふるさと福島」に自信と誇りを持ち、ひとり一人が新しい福島づくりの主役として力強く歩んで行かれることをご期待申し上げ、お祝いの言葉といたします。

平成31年3月1日

福島市長 木 幡 浩



校歌

わが学び舎の

名もゆかし

桃李の花の

匂へれば

ものいはねども

慕ひくる

かげやこみちと

なりぬべき

金剛石の

みさとしに

阿武隈川の

よどみなく

進みゆく世に

遅れじと

いそしむ技の

楽しさよ

仰げば尊し

一、仰げば尊し わが師の恩

教えの庭にも はやいくとせ

おもえばいととし このとし月

今こそわかれめ いざさらば

二、たがいにむつみし 日ごろの恩

わかるるのちにも やよわするな

身をたて名をあげ やよはげめよ

今こそわかれめ いざさらば

三、朝夕なれにし 学びの窓

ほたるのともし火 つむ白雪

わするるまぞなき ゆくとし月

今こそわかれめ いざさらば

蛍の光

一、蛍の光 まどの雪

ふみ読む月日 かさねつつ

いつしか歳も すぎのとを

明けてぞけさは 別れゆく

二、とまるもゆくも かぎりとして

かたみにおもう ちよろずの

心のはしを ひとことに

さきくとばかり うとうなり